

「憐れみ深い人々は、幸いである。その人たちは憐れみを受ける。」(マタイによる福音書5:7)

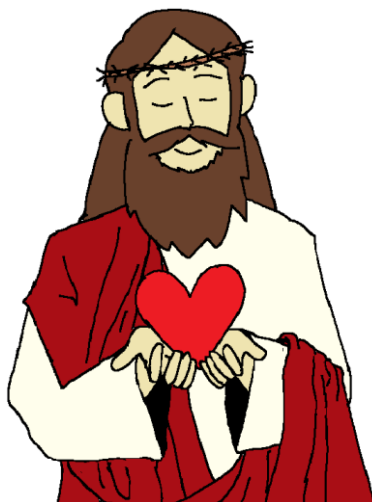
「あなたは憐れまれている」

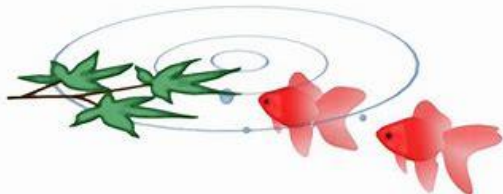
今日のメッセージのタイトルをお読みになって、どのような印象をお持ちになられたでしょうか。嬉しい！と思われますか？そんな筋合いはない！と嫌な気持ちになった方もいらっしゃるかもしれません。そもそも「憐れむ」とはどんな意味を持つ言葉なのかということです。辞書で調べますと「可哀そうに思う」や「可愛がる」といった説明がされています。つまり、憐れみを受ける人は常に憐れむ人よりも立場が下であったり、悪い境遇であるという事ですね。そう考えますと、いきなり「あなたは憐れまれている」と言われると、「私はそんな可哀そうな人ではない！」と文句の一つでも言いたくなるかもしれません。

しかし、聖書において「憐れむ」という言葉は全く違う意味を持っています。言い換えるならば「変わらぬ愛」、「相手の幸せのために自分の大切なものを捨てる」といった具合です。つまりこれは神様の愛を示す言葉なのです。「憐れむ」とは誰にでもできる者ではありません。憐れみには条件があるのです。①対象者を選ばない、②自分自身のことを考えない。

②については状況次第では可能でしょう。私達は好きな人をこのように愛することができるかもしれませんが、自分の全てを捨てても惜しくないと思えるほどの存在が、多くの人にはあるのではないのでしょうか。しかし私たちは弱く、それでもなお捨てることを恐れてしまうかもしれません。相手が好きどころか敵対する存在であればなおさらです。条件①の難しいところは、憎んでいる相手、自分にとってあまり価値を感じない存在をも、好きな人と同じように愛するという事です。しかし私たちはそのような愛を実践することができず、好きでもない相手のために僅かしかない中から自分の物を失ってまで分けることはできないのです。完全な愛で愛したいと願いながらも、自分中心の思いが憐れむことを阻んでしまうのです。

では、憐れみとは所詮夢物語で、存在しないものなのでしょうか。いえ、この世でただお一人、憐れみによって愛して下さる方がいます。それはイエス様です。私達はイエス様が「優しいお方」だから愛しているのではありません。イエス様のことを愛さず、逆らってばかりいる、本来価値のない私たちのために「命を捨てられた方」であるからこそ、信じ、愛しているのです。イエス様は私たち全ての者(つまり信じているかどうかにかかわらず)のために、惜しまずご自分の命を捨てられました。十字架にかけられ苦しんでおられるイエス様を見て笑っている人々のために、神様の赦しを祈って下さったのです。そして今も、人を憐れむことのできない私たちを、イエス様は憐れんでくださっているのです。わたしのために命すら捨てて愛して下さる方がいる。この大きな愛を知る人は幸いです。





2021年8月1日

認定こども園福光青葉幼稚園

園長 横山一乃

保育理念	受ける愛 与える愛
	愛されていることを知り・愛される者となるために



「 祈り合う 」

4年に一度開催されるスポーツの祭典「オリンピック」が、7月23日に開幕されました。コロナ禍により1年延期となつての開幕です。パンデミックの中、強いて開催されたオリンピックにはそれなりの意味があるのでしょうか。五輪憲章は、大会などを通じた活動の目的について「スポーツを通じ、若者を教育することにより、平和でより良い世界の構築に貢献する」とオリンピックの意義を唱えています。そうであつて欲しいと願うのは万人の思いなのではないでしょうか。国籍、人種、性別、等々、様々な困難を乗り越えて4年に一度の最高の舞台に立つアスリートの方々に、敬意を表し競技を温かく見守り声援を送り楽しみたいと思います。

さて、8月には忘れてはならない記憶に留めたい日があります。それは、6日(広島に原爆投下)9日(長崎に原爆投下)15日(終戦記念日)です。この日がどのような日であつたかを知る方々が、年々少なくなつていくことに危機感を覚えています。幼稚園では、戦争により尊い沢山の命(人間・動物・鳥や魚・草木)が理不尽に奪われてしまったかを、絵本「かわいそうな象」「ちいちゃんのかげおくり」「まっ黒なおべんとう」等を読み「平和」について考える時を持っています。「平和」とは、戦争がない世界だけではありません。争いは、自分が正しい、自分さえよければそれでよい、自分が大事、と自分を守る姿勢から生まれてくるのではないのでしょうか。

自己中心性は、誰もが抱く思いであるように思います。乳幼児期(2歳~7歳)は特に自己中心的な存在です。子どもは常に自分が世界の中心にいて、自分を客観視することや、自分と違う考え方や気持ちがあるということを理解できないと言われていきます。自分と他者の違いが明確にわからないため「自分が楽しければ、相手も楽しい」「自分が悲しければ、相手も悲しい」というものの捉え方をし、心の中の世界と実際の世界の区別が出来ないため、思ったことや夢見たことが実在する、現実になる、と思つてしまいます。しかし、成長と共にお互いの主張をぶつけ合い、相手には自分と違う考えがあることに気付き、お互いの妥協点を見つけ折り合いをつけることを学んでいくのです。様々な人との関わりやコミュニケーション、そして相手への思いやりなどの経験を重ねながら成長していくのです。「平和」は自己中心から利他の心を持つ、相手の気持ちを想像してみるなどから生まれると思うのです。幼児期に安心して思う存分自己主張することが出来る環境を、整えていきたいと思つています。喧嘩もその一つです。それぞれの思いを吐き出し、相手には相手の思いがあることに気付く機会を沢山経験してなければ、学ぶことは出来ません。子どもたちと共に「平和」について考え、祈り助け合うことの大切さや必要性を覚え「平和を実現する人々は幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」聖書を目指して歩みを進めたいと思つています。 平和を求める祈り アッジ フランシスコ

神よ 私をあなたの平和の道具としてお使いください。

憎しみのあるところに愛を いさかいのあるところに許しを 分裂のあるところに一致を
疑惑のあるところに信仰を 誤っているところに真理を 絶望のあるところに希望を 闇に光を

悲しみのあるところに喜びをもたらすものとしてください 慰められるより慰めることを

理解されるよりは理解することを 愛されるよりは愛することを私が求めますように

私たちは与えるから受け 許すから許され 自分を捨てて死に 永遠の命をいただくのですから